

メディア・リテラシーとしてのメディア概論

齋藤俊則, 大岩元

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科

〒252-8520 神奈川県藤沢市遠藤5322

TEL 0466-49-1035

email: tsaito@crew.sfc.keio.ac.jp, ohiwa@sfc.keio.ac.jp

概要

普通教科『情報』の教員候補を対象とするカリキュラムのアイデアと、その授業案の一部を提示する。まずはじめに、この教科が情報科学とは別に、“人にとっての情報”を捉える観点を含むべきであることを主張する。そして、その主張にしたがう場合、教員候補が“人にとっての情報”を学ぶためのカリキュラムを構築する必要があることを指摘する。その後、これらの主張にしたがって筆者が考える、“人にとっての情報”を学ぶためのカリキュラムのアイデアを、「メディア・リテラシーとしてのメディア概論」として提示し、その内容の一部についての授業案を併せて提示する。

1. はじめに

高等学校に普通教科『情報』が新設されるにあたって、そのための教員をどのようにして確保するかが大きな問題となっている。とりわけ、短期的な移行措置の問題とは別に、大学においていかに教員を育ててゆくかという点が、長期的な問題として捉えられ、現在も議論の対象となっている。

長期的展望に立つとき、教員養成の問題は、すなわち、その教科のアイデンティティの問題に結びつく。なぜならば、どのような資質・能力を持った教員を育てるかということは、その教科が何をめざしているのかという点に依存するからである。普通教科『情報』について、そうした長期的な教員養成の問題が議論の対象となることの一因は、この教科の持つべきアイデンティティにいまだ不明瞭な点があること、あるいは、少なくともそれについての共通理解が十分には形成されていないこと、に求められると考えられる[1]。

ここではまず、普通教科『情報』のアイデンティティのなかに「人にとっての情報」を扱う教科である」という点が含まれるべきであることを主張する。そして、教員候補が“人にとっての情報”の本質を理解するためのカリキュラムが必要であること、それにもかかわらず、そのようなカリキュラムの構築が困難であ

ることも、併せて述べる。さらに、それらの議論を踏まえて、教員候補が“人にとっての情報”を学ぶための大学におけるカリキュラムの内容を検討し、その授業案の一部を提示する。

2. 普通教科『情報』のアイデンティティ

2.1 普通教科『情報』における情報科学の観点

普通教科『情報』を指導する教員に求められる資質・能力を論ずるための準備として、まずは、この教科のアイデンティティの大枠についての筆者の主張を示したい。ここでは、この教科のアイデンティティを、教科の主題としての“情報”を捉える際の観点[2]の問題として考えることにする。すなわち、この教科のアイデンティティが、まずは「情報を扱う教科である」という点に見いだされるは当然のこととして、ここでの議論の焦点となるのは、この教科が“情報”を捉えるために、いかなる観点を持ち合わせるべきなのかということである。

周知の通り、普通教科『情報』は、情報に関する科学的な理解を育むことを一つの目標としている。この目標は、コンピュータを中心とする情報技術の基本概念の理解や活用技能の習得と密接に結びつくものと考えられる。すなわ

ち、ここから普通教科『情報』における情報とは、ひとまず、“(狭義の)情報科学の観点”から捉えられる情報を指すものであるという見解を、得ることができる。

情報科学における情報の捉え方は、常に「コンピュータによる処理の対象となること」という目的に結びついている。そのような観点から捉えられる情報の性質とは、当然、この目的の存在と不可分のものである。すなわち、この観点によって見いだされる情報とは、主観を離れて実在する、客観世界の表象としての情報であり、そのようなものとして情報を捉えることにより、コンピュータによる処理の対象として必要な諸々の性質(たとえば形式化や符号化による演算可能性など)が確保される[3]。

しかしながら、普通教科『情報』においては、先ほどの目標に加え、情報社会に主体的に対応し参画する能力・態度を育むことも目標とされている。このような能力・態度を育むためには、情報科学の観点のみから情報を捉えるだけでは不十分であると、筆者は考えている。その理由は、情報科学の観点が提示するのは、コンピュータによる処理という目的に結びついた、非常に限定された情報観であり、それが明らかにするのは、情報社会を形成する人間の活動に関与する情報のうちの一部分でしかないと考えられるからである。

2.2 “人にとっての情報”の観点

それでは、情報社会に主体的に対応し参画する能力・態度を育むために、情報科学の提供する観点の他に、いかなる観点が必要となるのか。このことを考えるうえでの手がかりは、情報の“読み手”に注目することによって得られると考えられる。すなわち、情報科学の扱う情報とは、究極的には、コンピュータに読み取らせるための情報であるといえる。それに対して、情報技術が社会の情報化を促すといった場合、その過程には、社会を形作る人間によって

読み取られる情報が介在することになる。つまり、“コンピュータにとっての情報”に特化された観点としての情報科学に加えて、この教科には、“人にとっての情報”を捉えるための観点が含まれるべきであると考えられるのである[4]。

ここでいう“人にとっての情報”とは、私たちの日常的な活動に影響を与え、そのことによって、情報社会という特定の傾向を持つ社会の形成に結びつく情報である。ある社会に見いだされる傾向は、様々な条件の規定力が同時かつ複合的に作用する状況において、許容される選択肢からの選択としておこなわれる人間の活動が関連しあうことによって、日々(再)生産される[5]。情報社会を生み出す我々の活動にとって、情報技術の普及は確かに大きな規定力を持つ条件ではあるが、その他にも、文化や政治・経済、歴史や慣習など、様々な条件が社会の形成に対する大きな規定力を持つものと考えられる。これらのことを踏まえるならば、情報社会に主体的に対応し参画するうえでは、“人にとっての情報”が人々を動かし、結果として情報社会を作り出すプロセスにも目を向ける必要があると考えられる。すなわち、情報技術をはじめとする様々な社会的条件が我々の日常にいかなるコンテキストを提供し、そのコンテキストのなかで読み取られる情報が日々の活動の選択にいかなる影響を及ぼしているのか、また、そのような我々の活動が情報社会と呼ばれる社会のいかなる特質を生みだしているのか、といったことを理解することが不可欠であると考えられるのである。

このような“人にとっての情報”を捉えてゆくためには、情報科学とは異なる観点をもち合わせる必要がある。少なくとも、私たちが日常的に接している情報とは、私たちの存在に先行して実在する客観世界の表象としてのそれではない。むしろ、日常的な現実においては、情報の側が私たちの世界像を積極的に作り上げてゆ

く。そして、そのようにして作りだされた世界像を頼りにおこなわれる私たちの一つ一つの活動が、その都度新たな情報を生成し、私たちの世界像を絶えず更新してゆく。この教科には、こうした“人にとっての情報”を捉えてゆくための観点を含むことが不可欠であると考えられる[6]。

2. 3 構築されるべきアイデンティティ

したがって、長期的に見た場合、普通教科『情報』のアイデンティティは、次のような大枠のもとに構築されるべきであると考えられる。まずはじめに、この教科の第一のアイデンティティは、「情報を扱う教科である」という点に求められる。このとき、教科の主題としての「情報」を支える基軸は、常に「情報技術」と「情報社会」という二つの副題に置かれることになる。そして、この教科の内容は、主に「情報技術」の側から「情報」を扱うものと、「情報社会」の側からそれを扱うものによって編成される。すなわち、「情報技術」の側からは“コンピュータにとっての情報”を、そして「情報社会」の側からは“人にとっての情報”を、という形で、二つの側面から対等の比率で「情報」を扱うことが理想的であると、筆者は考えている。

3. 教員に求められる条件と、それを満たすためのカリキュラム

これまでの議論から、普通教科『情報』が、すくなくとも長期的には、“コンピュータにとっての情報”と“人にとっての情報”という二つの側面から情報を扱うべきであるという筆者の主張が明らかとなった。この主張にしたがうならば、この教科を指導する教員には、最低限、以下に示すような条件が求められるはずである。また、それと同時に、そうした条件を満たす人材を育てるためのカリキュラムも必要と

なってくる。

- ① “コンピュータにとっての情報”の本質を理解していること
- ② “人にとっての情報”の本質を理解していること
- ③ ①②の内容を正しく伝えることができること

ここにあげた条件は、教員に求められる資質・能力の最も大きな区分を示したものである。当然ながらそれぞれの条件は、必要に応じて、さらに細かいものへと分割することができる。しかしながら、ここではそれはおこなわず、大学においてそれぞれの条件を満たす人材を育てるためのカリキュラムの議論へと進むことにする。また、③の条件に関しては、具体的な授業技術（授業の計画方法やプレゼンテーションのしかたなど）の習得の問題が関わってくると考えられるが、その内容は本論の範囲から越えるため、今回の議論からは除外する。

①の条件については、すでに情報科学という確立された分野が存在する。したがって、この条件を満たす人材を育てるにあたり、教員候補である学生が学ぶべきことや、学んでゆく際の順序などは、現段階でも比較的明確であると考えられる。もちろん、情報科学の専門家の育成ではなく、あくまで普通教科『情報』の教員の育成である場合に、カリキュラムの編成において内容の取捨選択の問題や、どの程度の深さまで立ち入るのかといった問題が生じてくると考えられる。しかしながら、情報科学という一つの共通理解が存在することは、カリキュラムを構築するうえでの大きなアドバンテージであるといえる。

それに対して、②の条件を満たすためのカリキュラムを構築するにあたり、その内容の中核となるべきものを探するのは、①の場合以上に難しい。なぜならば、“人にとっての情報”を体系的に扱う学問として、情報科学と同程度に確立された分野は、現在のところ存在しないから

である。“人にとっての情報”に関する知見は、哲学、言語学、社会学、文学をはじめ、人文科学を中心とする様々な分野によって、長い歴史にわたって集積されている。しかしながら、それらの知見はそれぞれの分野のなかに散らばっており、また、情報を捉える際の観点も、それぞれの分野、あるいはその中の論者によっても様々である。その意味で、既存の学問分野のなかから、“人にとっての情報”を統合的に捉えるための観点を提供する、情報科学にあたるような体系的なモデルを探し出すことは、現時点では非常に困難であるといえる。

したがって、②の条件を満たす人材を育てるためには、“人にとっての情報”に関する各分野の知見を見直したうえで、それらをあらためて「情報」の主題のもとに統合するカリキュラムを自力で作成しなければならない。以下では、そのようなカリキュラムに関する筆者の提案と、その一部に関する具体的な授業案を、順次提示してゆく。

4. 「メディア・リテラシーとしてのメディア概論」のアイデア

4. 1 なぜメディアに注目するのか

“人にとっての情報”の特性の理解を育むためのカリキュラムの具体案として、ここでは「メディア・リテラシーとしてのメディア概論」と題する授業の概要を提示する。ただし、概要の提示に先立って、ここでは教育の題材としてメディアに注目する理由を述べることにする。

“人にとっての情報”の特性の理解を育むうえで、メディアを題材とする授業をおこなうことが望ましいと考えられる。その理由は二つある。一つめは、メディアという具体的な対象の存在が、情報という抽象概念の理解を促すこと、そしてもう一つは、メディアというトピックを導入することで、情報技術と情報社会の接

点を学ぶことができることである。それぞれについて、もう少し詳しく触れてみたい。

まず、“人にとっての情報”の本質を学ぼうとする場合、自ずと学習内容は、認識論、存在論などの哲学の領域に踏み込まざるを得ない。しかしながら、具体的な対象を欠いた状況で哲学的な抽象思考をおこなおうとしても、そこから得られる理解は表面的なものにならざるを得ない。その意味で、“人にとっての情報”の特性に関する考察は、情報をもたらす具体的な対象についての考察と不可分のものであるべきだと考えられる。したがって、授業を構想する際には、たとえばメディアのように、情報をもたらす具体的な対象についての読解や考察から徐々に抽象的な領域へと導入してゆくことが望ましいと考えられるのである。

つぎに、この授業が普通教科『情報』の教員候補を育成するためのものであると意識する場合、情報は社会の存在とともにあるという見方が必要となってくる。すなわち、先に示したように、この教科が情報の科学的理解を形成しつつ情報社会への主体的な対応と参画を促すものならば、それを教える教員は、情報社会のあり方を情報技術の普及と関連させて位置づけることができなければならない。そして、情報社会と情報技術との接点を考える場合、その一つとしてメディアの存在をあげることができると考えられる。すなわち、一方で、情報社会は、情報技術の発展・普及がメディアを取り巻く状況に与えた変化によって出現した社会であるという捉え方が可能である。しかしながら、他方で、社会に存在するその他の条件が個人によるメディアへのアクセスに対して影響を与え、そのことが情報技術の発展・普及のしかたにも影響を及ぼすという面も存在する[7]。このように、情報社会と情報技術を結びつけるトピックとして、メディアの問題は大きな意味を持つと考えられる。

4. 2 「メディア・リテラシーとしてのメディア概論」の概要

上述の動機に基づいて構想された「メディア・リテラシーとしてのメディア概論」の概要を示すことにする。

この授業は主に、メディア論、記号論、社会学、カルチュラル・スタディーズなどの分野において提出されたメディアと情報、そして文化・社会に関する様々な論考の助けを借りながら、また同時に自分の力で実際のメディアテキストを分析・考察することを通して、受講者各自が情報社会におけるメディアの役割と、その作用によって生ずる“人にとっての情報”の特性を理解することを主題とする。

この授業のタイトルにあるメディア・リテラシーとは、「メディアとは何か」という根元的な問いを通して各個人の中に確立されるメディア観であり、また、そのようなメディア観に基づいてそれぞれにふさわしいメディアとの距離や接し方を主体的に選択する能力であり、さらに、必要に応じてメディアの向こう側にいる他者との関係を築いてゆく力である。これらは、「強者・抑圧者としてのマス・メディア / 弱者・被抑圧者としての視聴者」という図式によるメディア批判を復唱したり、あるいはパーソナルメディアの普及によって「誰もが平等に発信者・表現者になれる（なるべきだ）」と信じ込んだりする前に、そのようなメディアに関する固定化した図式や信念がなぜ生まれてくるのか、それらが説得力を持つとしたらなぜなのか、といったことを、“人にとっての情報”と特性と照らし合わせて考え直し、自己の責任においてメディアとの関わり方を決めてゆく態度に結びつくものである。メディアに対するこのような態度は、普通教科『情報』の教員のみならず、立場の違いを越えて、情報社会と主体的に関わってゆく多くの人に求められるものだと考えられる。

“人にとっての情報”の特性を理解し、上述

の意味でのメディア・リテラシーを習得するためには、メディアが日常生活の中に浸透する状況や、その状況と自分自身との関わりを、常に見直しの対象とする視点が必要となる。実際に、このような視点に基づいて描き出されたメディア像は、現在様々な分野における論考の中に見いだされる。この授業は、それらの論考を手がかりにしながら受講者が自分なりにメディアを対象化する視点を築くこと、そしてその視点から各自にふさわしいメディア観を模索してゆくことを主眼におきながら企画されるものである。

4. 3 「メディア・リテラシーとしてのメディア概論」の内容

上記の概要に基づいて授業を構想する場合、おおむね以下のような内容が必要であると考えられる。

①メディア論的視点の理解：まずは、情報が広義のメディアのあり方によって左右されるものであることを学ぶ。例えばマクルーハンが述べるように、「メディアはメッセージ」[8]たりうるのである。このことを学ぶことの目的は、メディアが決して無色透明な器ではないこと、言い換えれば、情報が表現、ならびに物理的根拠としてメディアと一体不可分のものであることを知る点にある。

②記号論の基本概念的な理解：記号論の基本概念的な概念を学ぶ。とりわけ、コードとコンテキスト、差異と価値、価値体系の恣意性と相対性といった概念を学ぶことを重視する。このことの目的は、まず第一に、人が情報＝意味内容を読み取るメカニズムを知ること、とりわけ、“人にとっての情報”が客観的な実在世界によって根拠付けられるものではなく、恣意的に構築された価値体系としてのコードに依存することを理解させる点に重きを置く。また、それと同時

に、情報の発生にとって「読む」という行為が本質的な役割を果たすことに気づかせる。

③記号論に基づくメディア読解の実践：実際のメディアテキストを用いて読解をおこなう。このことの目的は、先に学んだ記号論の基本概念を実践的に定着させることと同時に、情報が読み取られるメカニズムを意識しながら読解をおこなうことにより、各自の日常的なメディア視聴を相対化させる点にある。メディアテキストから単に情報を受け取るだけでなく、一定の情報を読み取らせるために施された様々な表現上の工夫を発見してゆくことを通して、主体的かつクリティカルな読み手としての視点を育むことをめざす。

④情報の生産過程に関する学習：情報が生産される過程を、メディアテキストと読み手の一对一のスタティックな関係から、より複合的かつダイナミックな関係へと視点を移しつつ学習する。とりわけ、メディアのもたらし情報に焦点を当てるならば、情報は、送り手と視聴者との関係のみならず、視聴者同士のコミュニケーションや、メディア、送り手、視聴者の生活する社会のもたらし様々なコンテキストの関与によって、ダイナミックに形成される。さらに、そうしてもたらされた情報が視聴者の行動に影響を与えることにより、その形成に関与する条件に対して、逆に働きかけるという面も持つ。そうしたメディアのもたらし情報を例に取りながら、“人にとっての情報”の特性の一つである、ダイナミックな創発性についてを学んでゆく。

⑤メディアと文化・社会との関連についての学習：④で学んだ情報の創発性が、文化や社会を一定の傾向のもとに編成してゆく一つの大きな原動力であることを学ぶ。すなわち、情報社会と呼ばれる社会の持つ様々な傾向は、単に情報

技術の普及のみによってもたらされるのではなく、それを含めた文化的・社会的諸条件の複合的な作用によってもたらされるものである。そのような観点から、ここでは、メディアの作りだす情報社会、とりわけ、メディアからの情報が我々の活動に与える影響と、そのような活動によってもたらされる社会の「情報社会」としての傾向、そしてその過程に関与する様々な文化的・社会的条件、さらに、その背景にあるメディアの動機などを検証しつつ学ぶことをめざす。

5. メディア読解の授業案

5. 1 記号論に基づくメディア読解

最後に、先に示した「メディア・リテラシーとしてのメディア概論」のうち、「③記号論に基づくメディア読解の実践」の部分に関するより具体的な授業案を提示する。想定される授業時間は1コマを90分として3コマ分であり、対象となる学年は学部2年生以上である。授業は以下の段階を踏みながら進行するものとする。

・第一段階の読解（1コマ）→概念的理解の形成（1コマ）

そして、これらの授業に加え、第二段階の読解として位置づけられるレポート課題を課すことによって、この部分のすべての内容が実現される。

5. 2 メディア読解の実践（1） 第一段階の読解

1コマめの授業は、以下の三つの目標を持つ。

- ①“人にとっての情報”と、いわゆる客観的情報との違いを実感させる
- ②メディアテキストから読み取る情報のおおもととなるものが、メディアテキストのなかだけではなく、読み手の頭のなかにもあることを理

解させる

③メディアテキストに含まれるコード化された表現(＝形式)が、読み手に一定の情報を読み取らせることを理解させる

①の目標は、“人にとっての情報”を捉えるための基本的な情報観を構築することに結びつく。メディアテキストからは、客観的情報のみならず、漠然とした印象なども同時に読み取られる。それらは意識的に切り離す努力をしない限りは、不可分のものである。したがって、

“人にとっての情報”とは、基本的にはそれら全体を指すことを確認する。

②の目標は、メディアテキストから読み取られる情報が、読み手を取り巻くコンテキストや、コンテキストによって優先権を与えられたコードなど、読み手の側の要因に大きく依存するものであることを示すものである。そして、

③の目標は、そうした読み手側の要因の作用を誘発するメディアテキスト側の要因として、コード化された表現、すなわちコードに支えられた表現の形式が存在することを示すものである。送り手と読み手との共通理解が存在する限りにおいて、メディアテキストに含まれる様々な形式は、読み手を一定の方向へと誘導する指標として機能する。

これらの目標を踏まえて、1コマめは以下のような授業をおこなう。

(1)「このメディアテキストの差し出す情報は何か？」という設問、及び対象となるメディアテキストの提示と、受講者による読解及び「情報」の記述。引き続き、数名の受講者による読解結果の発表(20分)

(2)発表された読解結果を基に、受講者各自による「情報とは何か？」についての定義の記述(10分)

(3)授業担当者による、客観的情報と“人にとっての情報”との違いについての解説。及びこれまでの内容に関する質疑応答(20分)

(4)前回までの内容(記号論の基本概念的理

解)の復習として、読み取りにおけるコードとコンテキストの作用の講義による確認。続いて、各受講者による、(1)のメディアテキストの読解に関与した可能性のあるコンテキストの分析と記述(20分)

(5)授業担当者による、コンテキストとコード化された表現との関係の解説。及び「形式」の概念の解説。引き続き、授業担当者主導による、読解対象となったメディアテキストの含む表現の形式とその効果の確認(15分)

なお、上記の授業を実施するにあたっては、読解対象とすべき何らかのメディアテキスト

(教室の設備などによって選ぶメディアは異なるが、何らかの広告表現などが利用しやすい)と、受講者に配布する記述用紙を準備する必要がある。記述用紙は授業後に適宜回収し、成績評価や今後の授業の参考として活用することができる。

5.3 メディア読解の実践(2) 概念的理解の形成

2コマめの授業は、以下の目標を持つ。

①メディアテキストに頻繁に見いだされる表現の形式とその効果を理解させる

②形式が成立するメカニズムを理解させる

③形式が成立することの意味を問い直させる

①の目標は、具体的には「対比」の形式とその効果としての「中心化」についての理解を指している。視聴者に読み取らせたい内容を、対比の構図によって際立たせるやり方は、多くのメディアテキストのなかに頻繁に見受けられる。対比の形式を用いることによって、対比される一方は注目すべき「中心」となり、他方はそれを際立たせるための「周縁」ないしは「背景」となる。さらに、対比の導入によって、その構図に収まらないものの隠蔽が同時に起こる。この、対比によって引き起こされる、「中心」と「周縁」ないしは「背景」の創出、そして、それに伴う隠蔽の効果を、「中心化」と呼

ぶ。

②の目標は、「対比」をはじめとする表現の形式が、基本的には反復によって再生産されるものであることへの理解を指している。この反復の過程（＝コード化の過程）には、読み手がその形式を学習し、そこに一定の意味を認めることも含まれる。形式とは所与の前提として（あるいは自然的条件として）存在するものではなく、提示と読解の反復の過程こそが形式を形式たらしめることを理解させることが、めざされている。

③の目標は、そのような反復の結果として形式が成立することが持つ意味を、あらためて問い直すことを指している。ここで想定されるのは、受講者が、形式の持つ便利さと同時にそのデメリットも把握することである。形式の便利さは、意味の伝達を容易かつ単純なものにすることができる点にある。それに対して、形式に依存することのデメリットとは、読み手が、現実よりも形式に真実を見いだしてしまう点にある。すなわち、“人にとっての情報”においては、現実を表象するために形式が用いられるのではなく、形式に合わせて現実が「ねつ造」されることがしばしば起こるのである。このことは、情報が積極的に世界像を作りだす働きを持つことを表している。

これらの目標を踏まえて、2コマめは以下のような授業をおこなう。

(1) 復習をかねて、前回用いたメディアテキストを提示しながらの、「形式」の概念の講義形式での復習。続いて、「対比」と「中心化」の概念の解説（15分）

(2) あらたなメディアテキストを提示し、受講者とともに「対比」の構図の確認。続いて、受講者各自による「中心化」の分析及び記述（20分）

(3) 授業担当者主導による、メディアテキストに見られる「中心化」の確認（10分）

(4) 授業担当者による、「反復と再生産」を

中心とする、形式の成立メカニズムの解説。さらに「反復と再生産」の議論を、言語コード、儀礼や慣習、社会制度等の成立メカニズムにまで敷衍。続いて、受講者に対して、類似例の指摘を促す（20分）

(5) 受講者を交えた、形式のメリット及びデメリットの議論。引き続き、授業担当者による、議論の整理と補足（20分）

なお、上記の授業を実施するにあたっては、「対比」と「中心化」の解説に用いるメディアテキストを準備する必要がある（「対比」の構図を明確に伝えるうえで、視覚メディアを用いることが望ましい。1コマめ同様、広告表現などが利用しやすい）。

5. 4 レポート課題による第二段階の読解

2コマめを終えた段階で、これまでの学習で得られた理解の定着をはかるために、受講者各自に自力でメディアテキストの読解をさせることが望ましい（第二段階の読解）。自力でおこなうことを重視する場合、ある程度の時間的余裕をもたせたいうえで、レポート課題とする方法が考えられる。仮に、およそ1500～2000文字の分量のレポートを想定するならば、例えば以下のような設問が考えられる。

<レポート課題> 複数のテレビコマーシャル

（30本以上）を視聴したうえで、以下のテーマにしたがって読解をおこないなさい。

1. テレビコマーシャルにおいて反復される主題を3つ以上あげなさい

2. テレビコマーシャルにおいて反復して描かれる人物像を3タイプ以上あげなさい

3. テレビコマーシャルのなかで見受けられる対比の構図を3つ以上あげなさい

4. テレビコマーシャルにおいて、対比の結果として創出される「主体と客体」の構図を観察しなさい。そのうちの3つの構図について、誰（あるいは何）が主体となり、誰（あるいは

何)が客体として描かれるかを指摘しなさい。
さらに、「主体と客体」の構図によって隠蔽されてしまったものを想像し、それが何であるかを指摘しなさい

5. テレビコマーシャル一般において、対比の構図が用いられる理由を考察し、記述しなさい

6. おわりに

普通教科『情報』のアイデンティティに関する主張に基づいて、教員候補が“人にとっての情報”の特性を理解するためのカリキュラムの提案と、その一部に関する授業案を提示した。前半の、この教科のアイデンティティに関する議論に多くの紙面を費やしてしまったために、後半のカリキュラムの提案がやや大雑把なものとなってしまった。しかしながら、この教科を取り巻く状況を鑑みるに、前半部分に示したような議論が、より多くの関係者によって今以上に活発におこなわれることが望ましいと感じられるため、あえて多くの紙面を割くことにした。カリキュラム及び授業案に関するより詳細な部分については、今後の課題とする。

さいごに、本論文を作成するにあたっては、帝京大学の武井恵雄先生による「情報学」の議論と、ご本人から賜った励ましの言葉に勇気づけられた。ここに、心よりの敬意を表します。

註と引用文献

[1]このような問題意識を踏まえておこなわれた、普通教科『情報』のアイデンティティをより見えやすいものにしてゆくための先駆的な試みとして、武井恵雄氏(帝京大学教授)による「情報学」の提案をあげることができる。詳しくは以下の論文を参照。

武井恵雄：情報学の構成原理としての情報行為、情報処理学会研究報告、CE-59-4(2001).

[2]本論のなかで用いられる“観点”という語は、認識論的基盤と言い換えることも可能であ

る。

[3]情報科学を支える認識論的基盤に関しては、たとえば次のエッセイが明快な議論をおこなっている。

西垣通：人工知能のレトリック、「思考機械」、ちくま学芸文庫(1995).

[4]この“コンピュータにとっての情報”と“人間にとっての情報”という区分は、筆者による以下の研究報告に示されている。ただし、“コンピュータにとっての情報”は、以下の研究報告のなかでは“計算機にとっての情報”として記されている。

斎藤俊則，大岩元：日常と社会から見た情報—「情報学」構築に向けた一試案—，情報処理学会研究報告，CE-60-1(2001).

[5]特定の傾向を持った社会が、日々再生産されるプロセスについてのこのような見方は、最近では、社会学におけるカルチュラル・スタディーズ(文化研究)のなかに顕著に見受けられる。たとえば次の文献を参照。

吉見俊哉：「カルチュラル・スタディーズ」，岩波書店(2000).

[6]“人にとっての情報”を捉える観点についての筆者の考え方は、註[4]に示される研究報告のなかに、さらに詳しく記されている。

[7]情報社会と情報技術との相補的な関係については、次の文献が明快な議論をおこなっている。

佐藤俊樹：「ノイマンの夢・近代の欲望 情報化社会を解体する」，講談社選書メチエ(1996).

[8]M.マクルーハン，栗原裕・河本仲聖訳，「メディア論」，みすず書房，p.7(1987).